



特定非営利活動法人 海苔のふるさと会 会報

大森 海苔のふるさと館 ニュース 29号

女性が語る海苔漁家のくらし

当館では、一年を通して多くの元海苔生産者の方々が活躍し、貴重なお話をお伺いしています。では、海苔の家に嫁いだ女性たちの暮らしや苦労はどんなものだったのでしょうか。

そこで、サポーター「はまどの会」の研修を兼ねて、女性から見た海苔漁家の暮らしを聞いてみました。

お話をしてくださったのは、大田区大森東2丁目にお住まいの伊藤きぬさん(81歳)です。

きぬさんは昭和6年に大森東の父親の代で始めた海苔漁家に生まれました。

学校を出たあくる年に同じ大森東の江戸時代より代々続く海苔漁家の一人息子のところへお嫁入りしました。昭和38年に海苔が終わるまでの苦労話と、その後、詩吟とめぐり会い、はばたき、今に至るお話を伺いました。

習い事

娘時代は戦争中で特殊鋼に学徒動員で働いたこともあり、おけいこ事などできなかつた。学校を出てすぐに嫁にきたので、伊藤家で裁縫を習わせてくれた。裁縫は産着、肌襦袢、なんでも2枚ずつお稽古して、家族みんなの着物を縫うようになった。時代が変わり機械編みをはやりだすと、高価な編み機も買ってくれて家族のセーターやおじいさんの毛糸のズボン下など編み喜ばれた。

当時はお祝に毛糸の束や反物をいただき、なんでも手作りした。娘は高校生頃まで母親の手作りの服を喜んで着てくれたが、息子たちは大きくなるといやがった。



昭和10年ごろの伊藤家の海苔はがし

海苔の時代

両親、夫、子供3人、それに海苔の季節になると山形から住み込みの手伝いが4人、みんなのご飯の支度、洗濯、海苔の手伝い(海苔を切る、乾すのが女の仕事だった)で一年中家事に追われていた。実家に帰るのは年に一度、母の命日に厳正寺に墓参りし、その足ですぐ



左がきぬさん

近くの実家に寄り、弟の部屋で2、3時間ねかせてもらうのが唯一の息抜きだった。忙しくて家の敷地から出ることはめったになかった。

その後

昭和38年、海苔が終わると御主人は銀行に勤め、きぬさんもPTAなど外に出る機会も増え、そんな時、詩吟と出会った。勧められて全国から集まる研修に参加したのが御縁で各地の友人と詩吟を通じた行き来が始まり世界が広がった。やがて海外旅行が一般的になりハワイなどが人気だったが、きぬさんは詩吟のふるさとである中国を訪ね、研鑽を積んだ。

今では、お弟子さんを教えるようになり、充実した毎日を過ごしている。

お話を聞き終えて

今年の12月には82歳になるというきぬさん、姿勢も美しく、声には張りがありお元気な様子にびっくり。詩吟に出会って幸せだとお話していました。海苔漁家のお嫁さんの苦労話を聞かせて頂くと想像していましたが、きぬさんの口から出ると苦労には聞こえません。

飾らない前向きな姿勢に感銘を受けました。ご主人と末長くお幸せにお暮らしてください。元気をいただきありがとうございます。ありがとうございました。

(信田幸子)

伊藤きぬさんは、生まれも嫁ぎ先も海苔漁家で、実家と嫁ぎ先は自転車で5分位の近くだった。かつては、結婚は本人の気持ちとは関係なく、また、大森は海苔のまち親戚も海苔関係で大森から外に嫁ぐことは少なかった。実家に帰られたのは一年に一度、母の命日だけだった。

嫁の仕事はまず跡取りの長男を産むことだった。長女の時は何もしなかったおじいさんが、長男のときはおぶったり、だっこしたりして大喜びした。

海苔生産の一年の仕事は冬だけではなく一年中忙しかった。少し暇ができるのは6月頃で、そのころ祝言をすることが多かった。昔は自宅で行い、魚屋から仕出し料理をとることも多かった。



海苔乾し場の前で、仕事着姿のご主人

冬になると、山形からシオトリ二人、ホシカエシ二人が出稼ぎに来た。時にはもう一人増えることもあった。全部の食事の仕度におわれる。朝二時頃から海苔つけ作業、終わると朝食の用意をする。大体がご飯、汁物、つけものくらい。そして男性は弁当を持って海苔とりに行った。弁当の中身はかつお節とのりで海苔巻きをつくる。

女性たちは日が出てきたら乾し枠をだし、海苔を乾かす。乾いたら海苔をはがした。お風呂もお父さんや子どもが先で、きぬさんは後に入る。出稼ぎの方たちは最後だった。風呂はマキで焚き、ご飯をカマドで炊くので、本当に忙しかった。

海苔とりの季節が終わると、男は網を編んだり修理したり、そしてヨシ刈り、ヨシを乾かす。八月頃になると乾くので女が葉をおとす。海苔簀編みは力があるので男性がした。その合間に男性たちは旅行に出かけるが、きぬさんは家から出ることはなかった。

昭和38年の春、海苔養殖の仕事が終わった。ご主人は銀行に勤めるサラリーマンになり、きぬさんもPTAの関係で社交ダンスを習うなど自分の時間が持つて持つてようになった。その後、詩吟と出会い、友達が日本



前列右が伊藤きぬさん

各地に広がり、海外も訪れた。今はお弟子さんも取るようになった。

海苔の時代は、朝暗いうちから海苔つけの仕事、ご飯の仕度、昼間は海苔はがし、夜は縫物などで寝る暇もなかったことを思うと、そうした時代が終わり、自由な時代になったことはよかったと言っている。

きぬさんが嫁いだ時代は、近くでも実家に帰れたのは年に一回だった。いつでも自由に実家に帰られるようになり、今はいい時代になりました。

(渡辺久江)

伊藤きぬさんのお話を聞いて感想

話をお聞きして印象に残った事が2つありました。1つは子供のころよく家業の手伝いをされたとの事。喜んで手伝ったのではないかもしれませんが、これはとても大切な経験だと思いました。

親が真剣に教えると子供に何か残りますね。

あと1つは真面目に日々の生活をこなしてきたからこそ今があるのではないのでしょうか。

きぬさんのきさくなお話に何か「余裕」を感じました。とても有意義な楽しいひとときでした。

(はまどの会：一文字昌子)



冬の陽を背に、舅と海苔はがし

特定非営利活動法人 海苔のふるさと会会報「大森海苔のふるさと館 ニュース」29号
平成24年10月1日発行
編集・発行 特定非営利活動法人 海苔のふるさと会
連絡先 東京都大田区平和の森公園2番2号
TEL 03-5471-0333
FAX 03-5471-0347